

巻頭言



附属学校教育局長 石隈利紀

TOSHINORI ISHIKUMA

筑波大学附属学校は国内外の「学校のモデル」になれるか：「親しみ」と「あこがれ」

学校教育は大きく変わってきている。学校には特色が求められている。そしてこの時代に、「附属学校は必要か」という議論がある。筑波大学附属学校は、全国の学校のモデルとして必要だと、私は思う。

「モデル」になるとは、他者がまねをしたい、そのようになりたいと思うことである。モデルになるためには、「親しみ」や「あこがれ」を感じてもらわなければならない。モデルの力を支えるのは、「権威」である。他者の行動への強制力をもつ「権力」は自らがもつ力であるが、他者の模倣を促進する「権威」は獲得するものである。

筑波大学附属学校のモデルの源泉として、親しみとあこがれから説明したい。「親しみ」とは、公立学校などが附属学校に自分の学校との共通点を見つけ、自校の学校教育の参考にしたいと思うことである。子どもの発達や学力の課題、また個に応じた援助は、多くの学校がそれぞれの問題状況を解決するのに役立つだろう。また附属学校に研修に来る先生は、附属学校の日々の教育活動に共感するだろう。

一方「あこがれ」とは、「自分の学校ではできない、またはできていないが、できるといいな」と思うことである。例えば附属小・中・高等学校の教科教育、駒場中・高等学校のSSH（スーパーサイエンスハイスクール）、坂戸高校におけるキャリア教育、特別支援学校における先導的な指導・援助は、多くの学校にとって「あこがれ」であろう。あこがれの学校は、学校づくりの原点であり、目標にもなる。

「親しみ」はモデルとしてのきっかけをつかみやすいが、新しいもの、参考になるものがなければ、モデルとしての地位を失ってしまう。そして「あこがれ」は、今の社会のニーズから遠い存在になれば、モデルとしての引力を失ってしまう。「親しみ」であれ、「あこがれ」であれ、附属学校がモデルとして貢献するためには、今日国内外で共有される教育課題に関連し、本来の教育をめざす、具体的な提案をつねに発信する必要がある。

今後も筑波大学附属学校は、全国、いや国内外の学校のモデルでありつづきたい。

目次

■巻頭言	筑波大学附属学校は国内外の「学校のモデル」になれるか：「親しみ」と「あこがれ」●石隈利紀
■免許更新制	附属学校頑張る！～教員免許状更新講習1年目～●小林 汎……………1 夏の駒場会場での更新講習●宮崎 章……………2 「免許更新制」附属視覚特別支援学校での取り組み●高見節子……………2
■PTA研修会	全附連PTA研修会における全国発信●館 潤二……………3
■交流会報告	平成21年度新任教員交流会報告●篠原吉徳……………3 ●熊谷恵子……………3
■附属の今	附属聴覚特別支援学校●今井二郎……………4
■研究紹介	通常学校における特別支援体制や支援方法に関する全国への発信●熊谷恵子……………4
■この指とまれ	「交流の輪」●元井千晶……………5
■新任教員奮闘中	「初心に返って」●河野雅昭……………5
■「科学の芽」賞	朝永振一郎記念 第4回「科学の芽」賞募集状況他●小林 汎……………6
■産業医の視点から	産業医の視点から見た教職員のメンタルヘルス●吉野 聡……………6

●広報誌名「ポローニア」の由来
「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia（後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む）こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名（Paulownia imperialis）に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。



附属学校頑張る！ ～教員免許状更新講習1年目～

附属学校教育局 教授 小林 汎

今年の4月以降に取得する教員免許状（「新免許状」）は、有効期限（10年期限）付となりました。また、それ以前に取得した免許状（「旧免許状」）により教職等で働いている方には、教員免許状更新講習が義務化されました。今年、実際に受講された方もいることと思います。

今年、筑波大学の講習には、延べ3100名程の方が受講をしました。全国の受講対象者の1.5%程の方が筑波大学が、「教育の筑波」としても社会的使命を果たしていると感じています。また、他大学にない特色として、附属学校11校が積極的にこの更新講習に取り組みました。日ごろ行っている公開の研究会とは一味違った、緊張感のある取り組みだと感じています。

附属学校が中心となった講習としては、「附属学校実践演習」を10会場19講習と、附属駒場中高と附属視覚特別支援学校の両会場での選択講習を23講習、あわせて42講習行い、延べ728名の現職教員の方が受講しました。昨年度の試行においても「附属学校実践演習」は高い評価を受けましたが、今年初めて取り組んだ駒場と視覚の両会場での選択講習も評判は良く、企画担当者としてホットしています。この制度に批判的だった教員の方からも「今回は受講して良かったと心から思えました」との感想をもらいました。また、実施する側も、「同僚に対してお金を取って教えることに大変緊張し、必死に準備した」との声も聞いています。こんな思いが受講生に伝わったものと思います。次年度も附属学校の新しい使命として取り組んで行きたいと思っています。



校長の経験を活かした講習（菅川先生担当）
「開かれた学校と危機管理」において



ワークショップの成果の掲示風景
「平田先生担当」必修Aの講習において



政権が交代して、この制度の手直しも予想されますが、全国120万人以上いる先生の「教員としての質を確保する」課題は、依然として重要なテーマです。今年度から建築士の3年に1度の定期講習（講義5時間、試験1時間）が義務付けられました。また、日本医師会は、開業医の質を確保するために、認定制度（3年有効期限）を始めるようです。教育立国としての基盤を強化する上で、先生の役割は重要であり、21世紀に求められる教員としての資質を確保できるようにしたいものです。
(教員免許状更新講習担当)

夏の駒場会場での更新講習

附属駒場高等学校 副校長 宮崎 章

夏休みの後半の3日間（8月22～24日）、附属駒場を会場にして筑波大学教員免許状更新講習を実施しました。「附属学校実践演習」だけでなく、どうせやるなら選択講習18時間をすべて駒場で受講することも可能にしよう、需要はあるのではないか、法制化されてしまった以上、現場の教員にとって役に立つ、有意義な講習を提供できないか。そのような思いから、この3日間のために、1年前からさまざまな企画・検討を重ね、8月中もずっとその準備を進めてきました。22日（土）が7講座（講師16名、受講者113名）、23日（日）が7講座（講師14名、受講者116名）、24日（月）の「附属学校実践演習」が講師11名、受講者31名。延べ260名の参加者を数えました。

新しいことをやるのは大変だ、夏休みが減ると敬遠する見方もあったかもしれませんが、しかし、積極的にかかわってくれた多くの先生方（本校教員は、20名が講師・スタッフ等として関わった）の苦勞は、受講者からのアンケートなどで、ある意味報われたようです。同じ教員仲間に講習を行う講師の立場になった教員は、緊張し、講習内容を高めるためにたくさん文献を調べたりと、本人にとっても大変勉強になる講習でした。隣のNTTデータ駒場研修センターとのつながりができ、場所をお借りすることができたのも、成果の一つといえます。民主党政権のもとで、将来的にどうなっていくかが不透明になっていますが、次のような感想がいくつもあることは、新しい可能性を感じさせてくれるものでした。